長編カラーアニメーション

よっちゃんのビー玉

広島で被爆死した４歳の少年の物語！
この物語を通して、原爆の恐ろしさを
子どもたちに語り継いでいきたい。

かいせつ

この作品は実話である。兄・実雄(十九歳)と弟・義雄(四歳)の広島駅の別れの話を聞き、「まっくろなおべんとう」「しんちゃんのさんりんしゃ」の児玉辰春が「よっちゃんのビー玉」という作品にしたのを、「はだしのゲン」「白い町ヒロシマ」の製作者の山田火砂子が企画・脚本で参加。原爆シーン等の美術には、「大空の城ラピュタ」「火垂の墓」「もののけ姫」等を手掛けた山本二三が背景を描き、新進気鋭の青木雄二が監督をしている作品である。

ものがたり

昭和二十年広島市。四歳のよっちゃんは、今日も大きな声で♪高く泳げよ鯉のぼり♪と歌を歌って、早く大きくなることを夢に見ながら、仲良しのひーちゃんと遊んでいた。東京・大阪が空襲で大きな被害を受けていた頃、広島はまだ静かな暖かい春の日だった。そこによっちゃんの大好きな大好きな、十九歳になる兄の実雄が働いている工場から帰ってくる。「よっちゃん、軍部の命令で、アメリカの目に付くから鯉のぼりはだめじゃけん、そのかわりこれどうじゃ」と、近所のガラス工場から拾ってきたビー玉を見せる。太陽があたってキラキラ光るので、よっちゃんは大よろこび。数日後、招集令状が来て、実雄は軍隊に入ることになる。戦地に向かうその日、広島駅でほのかに思いを寄せた雪江を見つける。雪江も気が付くが軍の命令でしゃべることができないので、実雄は手まねで母に知らせてと頼む。家族は広島駅へ駆けつけるが会うことはできない。だがよっちゃんは実雄の姿を見つけ、柵をくぐりぬけてホームへ入り、窓戸を締められた列車の窓の下で「兄ちゃん、兄ちゃん」と泣き叫ぶ。実雄はその声を聞きながら涙をポトリ。それがよっちゃんの声を聞いた最後だった。

広島は原爆を落とされ、よっちゃんはビー玉を摑んだまま死にました。戦争に負けた日本に、死ぬのを覚悟で出かけた実雄さんは生きて帰り、いつまでもいつまでも生きるつもりのよっちゃんは死にました。実雄さんはビー玉を探しましたが見つからないので、ガラス工場のあとの溶けたガラスビンを持ち帰り、ビー玉の兄弟として資料館へ寄付しました。

映画と原作者の講演を

原爆資料館の３遺品（弁当、ビー玉、三輪車）の原作者の講演とあわせてご計画ください。
原作の本などもサインして届けます。

◎小学生　1人　400円
◎中学生　1人　500円
◎高校生　1人　600円

この機会に　しんちゃんのさんりんしゃ　の上映もご検討ください。

広島映画社
広島市佐伯区五日市４－15-15
☎F　082-923-0645